

西教寺蔵『大方廣佛華嚴經感應傳』

渡 辺 信 和

本稿は、大津市坂本の天台真盛宗総本山西教寺の西教寺文庫に蔵せられる古写本『大方広佛華嚴經感應伝』の読み下しである。

まず該書の書誌を記す。

〔所蔵者整理番号〕 正経蔵189／番外／3番箱／2／3571／西教寺文庫

〔外題〕 後補表紙中央に打付で「大方廣佛華嚴經感應傳」と書く。

〔表紙体裁〕 後補／白色無地／鳥の子紙

〔本の装丁〕 仮綴じ（もともとは粘葉とおもわれるが表紙を付けた際に紙縫仮綴じとされている）

〔外装〕 無

〔寸法〕 縦25・3 cm×横14・9 cm

〔見返し〕（後補）

〔蔵印〕 1 表紙左下、朱陽二重廓方印3・4 cm 印文不明、

2 源装第一紙左下、墨陽單廓方印3 cm 「因明」、

3 同右上、朱陽單廓角印4・9 cm×0・9 cm 「西教寺文庫」

写本一冊

〔内題〕 大方廣佛華嚴經感應傳

見返し表左中央隅に「一交了」

〔郭枠〕 有／郭内寸法縦二〇・九 cm×横各一・七 cm

一面行数七行 ／一行字数一九字

〔料紙〕 薄様

〔本文用字〕 漢字・片仮名・（訓）（点）有

〔書入〕 有／同筆、朱・墨／校合及び訓

異筆／朱・墨／校合及び訓、棚書き

〔柱記事〕 留上部に「一」乃至「十四」と帳付け（別筆）

〔丁数〕 計三〇丁

〔跋〕無

〔尾題〕華嚴經感應傳一卷

〔奥書〕

卷末 雍熙參年舛月 日大宋兩浙台州使院董乍祿書

一点了（朱）

一校了

裏表紙「江州栗太郡芦浦 観音寺

慶安三年七月吉日 舜興藏「巻頭と同じ朱陽双廓方印」

論者は昨年国文学研究資料館の共同研究「随心院聖経と寺院ネットワーク」の報告書第一集（注1）において、随心院蔵の同書の翻刻を報告した。その時、資料館のマイクロフィルム（注2）で本書の存在を確認し、翻刻許可を得ていたのだが、資料館のマイクロフィルムでは朱筆が不鮮明でよく読み取れなかったので、校合の対象から外した経緯があった。写真で見ると限り古写本であり、声点があるように思われたので、改めて西教寺にお願いして本年四月三〇日にデジタル撮影させていただいた。結果おそらく院政期から鎌倉初期と思われる朱声点、振りかなを施された写本と認知できた。そこで、今回その声点に随った読みを提示するものである。朱筆による書き入れについて検討すると、その内容は、四声点、熟語

を示す符点、合点、振り仮名等である。その外に墨筆による訂正、止点、抹消、棚書きが見られる。四声点を付された文字は、後掲の表の如くである。

ヲコト点について検討すると、全ての部分に付されているわけではなく、説話によって粗密があり、同一話の中でも粗密がある事がわかる。さらに序から第六話までと、第七話以降とは同じ点図に拠っていないように見受けられる。

すなわち序ないし第六話は築島先生の「ヲコト点体系論」^(注3)の第三群と思われ、第七話以降は第一群と思われるのである。第三群に属すると思われる序ないし第六話の点はそれほど多くなく、どれと近似しているのかが指摘しづらいが、妙法院点もしくは西墓点が近い。第七話以降の第一群点は東大寺のそれとほぼ合致するが、二、三差異がある。それらを訂しつつ訓読しようとしたが、一部にどうしても理解できない点がある。末尾の表に疑問として示し本文は東大寺点に拠った。何故二種類のヲコト点があるのかは、本書の来歴に拠るかと思われる。もともと華嚴經の感応伝は、天台なじみが深い經典とは言えず、東大寺など法相系統で読まれた可能性が有ろう。それが天台宗の観音寺を経て西教寺に納められる間のどこかで天台系のヲコト点の一部に付されたものと思われる。祖本には全ての説話にヲコト点が付されていたかどうかは不明だが、現状の序乃至第六話までのヲコト点は付されていなかったと思われる。

- (1) 随心院聖教調査研究会編・二〇〇四年三月 所収「随心院蔵『大方広仏華嚴經感応伝』写本翻刻」
- (2) 聖教蔵文庫 U R N 92 | 312 | 106 No. 182 | 215
- (3) 『平安時代訓點本論考ヲコト點圖假名字體表』汲古書院 一九八六年十月

釈文私案

凡 例

- 一、ヨコト点は、片仮名で記した。
- 一、（ ）内の片仮名は右訓の送りがな、右訓は振り仮名の位置に置いた。左訓はそのまま左訓とした。不読漢字は「」に入れて示した。
- 一、平仮名は筆者の補読。
- 一、濁音は私に付した。
- 一、朱筆による切点等は以下のように表記した。

朱による圈点「・」、右下切点「ㄣ」、中央懸点「」、音合及び訓合「・」、合点「へ」
- 一、段落を私に切り、文の区切りには空格を開けて示した。また会話には「」を記した。
- 一、一部に墨消し文字がある。判読可能な部分は表記し、抹消線を付したが、判読不可能な文字は「●」で示した。
- 一、第四話冒頭は改行されず、第三話末に続けて記され、行頭に「四・」とし第四話の始まりに合点が記される。
- 一、第四話に長い衍字部分があり、その冒頭と末尾に抹消の記入がある。そのまま転載した。
- 一、補入はその所に「○」を記し、右乃至欄外に記入されるが、それにも朱点が施されているので、そのまま本文として組み入れ、補入である旨を示さなかった。
- 一、各話末に訓の根拠を示したのは、『教聚名義抄』（風間書房）によった。

大方廣佛華嚴感應傳

四明山大方廣無生ノ居士、胡ノ幽カ貞、刊纂す。

此ノ傳ハ本華嚴ノ疏主藏公ガ門徒ノ僧慧英ガ集メテ上下兩卷と為^セ(リ) 今予其の事の外に浮・詞(ヲ)鄙^ヤ(シムテ) 祥・感(ニ)〔於〕蕪^{アレクタルヲ}(シテ)乃ち筆削^{思反滅也敗也}して一卷と以・為(ス) 茲の秘乗を〔於〕見聞すること有ら俾^シ(ム)るも の難遭の想を生じて各受持を勉^{ツト}(メシム)

俾シム(名仏上12)

一・西域ノ無着菩薩ノ、弟、天親は少くして内氏を習ひ。長じて五部に通ず。初(メ)小乗を業(トシテ)小乗論を造ること五百部なり。無著其の聰穎^{アトモ}にして未だ大心(ヲ)發さ(ズ)、深(ク)小法(ヲ)媚^{ヲムテ}(ビテ)。大教を議^{ハカ}(ルコト)非らざるを愍み(テ)。遂に方便(シテ)疾(ヲ)示し人をして呼び(テ)〔而〕之を誘進せ使む。其の爲に廣く病の〔之〕因業を説く。天親遂に兄の〔之〕受持したまふ維摩法華涅槃華嚴等の經を以て聲を抗^ア(ゲテ)轉誦す。無着凝聽(シテ)且は喜び且は悲む。天親經を覽^ミ(テ)數辰(アテ)、方に信悟を獲て深く華嚴一乗を敬ひ是れ諸佛の境界なりとす。遂に小を捨て大を師と(シテ)深く自ら咎を悔ゆ。利刀を以て舌を斷たむとし〔欲〕前過を謝せむと為^{フモ}(フ) 無著之を誡めて曰はく、「向に汝の口を以て權教を激揚し真乗を毀^{百反}斥し今還て汝の口を以て真乗を讃美すれ(バ)自ら深累を滅(シテム) 何ぞ舌を斷たたむと爲す。」と。天親是に〔於〕山に入り華嚴を受持して後に十地論を造る 通ぜざる所有れば來(テ)無着(ニ)問ふ。無着未だ通ぜざれば知足天に昇り慈氏(ニ)請^{決反}訣^{サツム}ス。論纔(ニ)絶筆(セシカバ)。地大に震動す。論光明を放ち數・百里を照らす。國を擧げて慶異す。廣く無着の傳の中

の説の如し。

向サキ（法下40）

二 魏朝并洲の、僧靈辯。童子（ニシテ）出家し。心を佛乘（ニ）精（ク）。専ら華嚴を以て業と為す。時に未だ疏論有らず。毎に玄旨を思ひ 請益所無し。是に〔於〕道場を嚴飾（シテ）。華嚴（ヲ）頂戴す。晝夜に行道すること。六年有、餘歩くに血（ヲ）流し文殊（ノ）。加被（ヲ）哀請し 輿典に通ぜん（ト）誓（フ）。克、誠替（ムコト）無く（シテ）。忽（ニ）一夜に〔於〕童真（ヲ）感、見（ス）明（ルニ）及び華嚴法界七處九會（ヲ）朗か（ニ）悟り（ヌ）即ち微定に入り皎なること當、時（ノ）若（シ）猶ほ目に靚。耳に聆け（ルガ）心ニ領ズることを。歴（タルガ）ごとく（シテ）昔未だ可ならざる所の今通ぜ不る無し。遂に彼の洲西縣の瓮山の中（ニ）〔於〕華嚴論を造ること一百卷なり。

替ヤム（仏中98） 皎アキラカナリ（中仏中97） 聆キク（仏中2）

三・洲西縣瓮山中造華嚴論十百卷東晉の沙門支（ノ）法領は。幼年（ニ）出家し（テ）。心行精志（ナリ）能仁の滅後正教の凌替する（ヲ）悲、嘆（シテ）乃ち西天に往き（テ）聖典を詢（ヒ）求（ム）。行き（テ）于闐（ニ）至る忽（ニ）西來（ノ）三藏、一乘法主、佛駄跋陀羅（ニ）遇ふ 此には覺賢と云ふ。釋迦ノ種姓、甘露飯王の（之）裔孫なり〔也〕。是（レ）大乘三果の人なり 即ち第三地の菩薩（ニ）當（レリ）華嚴梵本三万六千餘偈を將て來れり。若し經中に〔於〕通ぜ不る所有れば即ち兜率に昇り弥勒世尊（ニ）請、問（ス）。法領、三藏に慈（ヲモテ）震旦（ニ）降（シテ）華嚴を流、通したま（ヘト）請ふ 依りて〔而〕來（レリ）。京師（ニ）に安置す。行坐凡と

〔與〕同じから不。或は臆脯の間〔於〕（ヨリ）出入するに礙無し。同・住（ノ）諸僧悉く皆驚・異（シテ）、咸（ナ）之を魔（ナリト）謂（ヘリ）。衆僧、遂（ク）三藏に問ひて曰はく「法師、人（ニ）過ぐる法を得たる〔耶〕（ヤ）」と。三藏對へ（テ）曰は（ク）、「吾今已に得（タリ）」と。諸師乃ち京城（ノ）僧衆（ヲ）集めて作法羯磨（シテ）、〔而〕檣棄（セムト）欲（ス）而る（ニ）三藏、遂（ニ）衣鉢を攝り空（ニ）昇りて諸（ノ）神變（ヲ）現（ス）騰（レル）身、坐し（ナガラ）飛び（テ）、南揚洲（ニ）往（キヌ）鳥（ノ）空（ヲ）翔ける（ガ）如し衆擧りテ愕（キ）悔（ユレドモ）、復た追ふ可から不義熙十四年三月十四日を以て建業、謝司空寺に於いて護淨法堂を造り華嚴を翻譯す譯經の時（ニ）當りて堂の前に忽然として、一の池化出す日毎に。旦（ニ）二り（ノ）青衣（ナルモノ）有り池從り〔而〕出で（テ）經堂の中に〔於〕洒掃、研墨、給侍し、際暮、還り（テ）池（ノ）中（ニ）宿（ス）相ひ傳へて云はく、「此の經久しく龍宮に在り、龍王此（ノ）翻譯（ヲ）慶ぶ（ガ）故（ニ）乃ち躬・自ら給侍（ス）るのみ〔耳〕」と。後（ニ）因り（テ）此（ノ）寺（ヲ）改め（テ）興嚴寺（ト）為し同じ（ク）翻譯の沙門慧業慧嚴慧觀等、三藏（ニ）從ひ筆授す吳郡の太守孟（ノ）、覬右衛將軍楮叔度等、檀越と為る元熙二年六月十日に至りて譯（シ）畢り（ヌ）。後ち守（ノ）永・初二年十二月二十日（ニ）至り梵本を與（テ）再（ビ）校・勘（シ）已り（ヌ）。宋主、求那跋陀羅三藏（ヲ）請じて此經を講ぜ（シム）三藏、恨む（ニ）方・音未だ通ぜず經旨を盡くさざるを以（テス）乃ち道場に入りて觀音を請念す未だ七日に盈たざ（ルニ）遂（ニ）漢首（ニ）梵頭を〔於〕易（フ）と夢みる因り（テ）即ち洞か（ニ）秦言（ヲ）解し（ヌ）時（ニ）換頭三藏と号す（ル）是なり〔也〕。

凡ミナ（僧中21）礙サハル（法中2）咸ミナ（僧中40）謂ヨモフ（法上49）對コタフ（法上144）舉コ
ソル（仏下末24）躬ミツカラ（仏上86）自ミツカラ（仏上8）洞アキラカナリ（法上2）

四・へ佛駄跋陀羅三藏、初闕中（二）至り（テ）鳩摩羅什法師（二）問ひて曰はく「汝所譯（ノ）經論云何」ド 什
の曰はく「法華維摩等の經。中十二門等の論（ナリ）」と。三藏（ノ）曰はく「君の所譯（ノ）如きは未だ人の度、
外（ニ）出で（ズ）何（ノ）廣（ク）大（ノ）名（ヲ）置（イテ）足（ラム）」と。時に、闕中（二）。盛り（二）
三藏（ヲ）稱（シテ）大論師（ト）為す 他・日（二）秦・主姚・興三藏を東宮に〔於〕請じて持・論せしむ。座下
（ノ）學士三千餘人あり。釋（二ハ）生・肇融・叡、等有（リ）儒（二ハ）謝靈運、費長房、等有 皆敢えて問
（ヲ）舉ぐる（モノ）莫し 什公乃ち聲（ヲ）抗（ゲテ）問ひ（テ）曰は（ク）「君云何（ニヲ）以て正見（ト）為る
や」と 三藏の曰はく、「謂ゆる一切法、空（ナリト）見（ルナリ）」と 什の曰はく「既（二）空（ナラバ）何（ノ）
見る所（カアル）」と。對へて曰はく、「空を見ること無見非らざる可し」と。什の曰はく「空見る可きや否や」と。
三藏の曰はく「空見る可から不」と 什又問ふ「君云何を以て色空を破す」と。三藏の曰はく「色自體無し 衆微
を聚めて以て色を成し 色を折ちて微に至る所以に色空なり」と。什の曰はく「君折色を以て微に至るを色空とせ令
む 當に云何 復た極微を破して空とするか」と。三藏の曰はく「衆人皆方分を以て之を分かつ 極微空を明らかに
す。吾が意然ら不」と。什の曰はく「意に〔於〕云何」と 三藏の曰はく「一微に由る故に衆微有り」と。「衆微に
由る故に一微有り、微自性無し 何ぞ之を折つこと有らむや」と。什公此を聞きて茫然として是れ何の言説なるかを
知ら不 遂に復た問は不。時に衆皆三藏一乘の深旨に達する莫し 又宗輔什公乃謂三藏無益（止）答●（於是）休

論三藏歸院已生肇●(寶)雲等。又詣問●(欲)訣之有什公聞此茫然不知是何言說遂不復問時衆皆莫達三藏一乘深旨又宗、什公(二)轉(ルモノ)乃ち三藏在答無(シト)謂(ヘリ)。是に〔於〕論(ヲ)休め三藏院に歸り已りぬ。生肇寶雲等又詣して問ひて前義を訣せんと欲ひて云はく「什公未だ所談を曉らず」と。三藏の曰はく「此の義了り難し 吾が言甚だ易し。什(モ)自ら憎(モウ反)のみ〔耳〕。什後ち又自ら問ふに、亦前の答の如し 終に之を究むる莫し。幽貞、此の什公の論を問ふ。一乘に〔於〕録す。道形(ノ)沙門有り(テ) 同く一乘之論を窺はんと欲ひて三藏の〔之〕説を聞く 故に此の中に附出す

云何イカム(仏上8) 折ワカツ(仏下本72) 轉カハル(僧中93) 欲オモフ(僧中49) 曉サトル(仏中101)
 五 北齊慧炬法師といふ(モノアリ)、幼く(シテ)〔而〕俗(ヲ)厭(ヒ)。長(ジテ)華嚴(ヲ)業(トス) 十
 五六年、道場中に〔於〕六時(二)礼・旋(シ)晝夜(二)誦・持(シテ)初(ヨリ)懈歇(カシ反)無し 寐夢(モウ)中
 (二)〔於〕見(レバ)一(ノ)童子(ノ)、自(ヲバ)善財(ト)稱(ストイフ) 慧炬(二)告(カシ反)げて言はく、「師既に能く華嚴を研・精(シテ)佛境(ヲ)究めん(ト) 欲(ヘリ) 明日(二)南に向かひて來(レ)」。師(二)聰明の藥(ヲ)與(ヘテ)師(ヲシテ)經(ノ)旨(ヲ)悟ることを得令め(ム)ト 慧炬明朝(二)、具(二)諸僧(二)陳(ジテ)遂(二)身(二)香湯洗浴(シテ)、淨衣を服手(ニ)香爐(ヲ)執り(テ)三寶に歸命(シ) 尋ね求む(ル) 所必ず夢(ノ)如きを獲(ムコトヲ)願(フ) 即ち童子(ト)與(二)南(二)行(ク)。心口專に(シテ)志、恒に文殊を念(ズ) 路(二)縁ること數里、忽に一の池を見(レバ)方圓半里(バカリナルニ) 雜華岸中(二)逆り(テ)菖・蒲有(リ)。意(二)菖蒲(ハ)是(レ)聰明藥(カト)思(フテ)爰(二)從・童(二)命(ジテ)

水に入(レテ)之(ヲ)採ら(シム)。忽(ニ)一(ノ)根(ノ)大(ナルコト)車・軸(如)(バカリナルヲ)獲(テ)寺に歸り丸・合す 纔(ニ)棗許(ヲ)服(スルニ)便ち輕・安を覺(ユ)。神・爽(ニシテ)日(ニ)万言(ヲ)誦す 因り(テ)華嚴(ヲ)精・解する(コト)を獲(テ)此(ノ)經(ノ)疏(ヲ)造る(コト)十餘卷。經を講ずること五十遍なり。

與トモニ(仏下末2) 緣 ヨル(法中134) 運メクル(仏上60) 意コ、ロ(法中76) 許ハカリ(法上61)

六・大唐の永徽年中に。居士樊^{樊 敏 僧 反 古文 樊字 龍也 潘也}(ノ)玄智有り、華嚴藏公の(之)同學なり。弱冠にして道に參じ五經、三藏、内

道通ぜ被れシに。専ら華嚴を以て業と爲す。方洲山中に居して初は松葉を餌^{クヲ}(フテ)六十餘年。誦持すること替ら不。

五十年(ノ)前(ニ)其(ノ)所(ニ)地(ヨリ)涌く甘泉(ヲ)感じ供ふるに。啻なら不足る。林に美菓を生じ樹

樹實繁る 遠近採取る。罍礙する所無し。忽に深雪雨り。行李通は不。齋糧時に竭く。是に(於)則ち山神有りて。

藥を送る。狀醍醐に似たり。味乳よりも(於)甘し。之(ヲ)一匙喫^{カヒクヲ}(ヘバ)七日飢^ウ(ヘ)不。益^マ(スニ)心力

(ヲ)加(シテ)身輕(ク)目明(ナリ)。若(シ)夜礼誦す(レバ)自ら燈^{キヤウ}有りて現(コト)。晝・日 經を誦すれ

ば則ち、衆鳥集(リ)聽(ク)。山神モ眷屬、身を現じて圍遶す。異香時^{トキ}(ニ)來る。奇菓、毎(ニ)至(ル)。有時

(ハ)夜誦す(レバ)口(ヨリ)光明を放ちて照す(コト)四十餘里に及び光色、金の如し 遠近驚異(ス)。或は有

る人往き(テ)山(ニ)尋ね到(レバ)唯居士(ノ)經(ヲ)誦する口(ノ)中の光明(ヲノミ)見(ル)時・年

九十有二。疾無くして(而)終る 茶毘の(之)時、牙齒變じて舍利と爲る 百餘粒を獲たり 悉く光明を放ちて數

日歇き不。時に(于)僧俗之を收めて塔を豎^{タテ}(テ)、供養(ス)。

採トル（仏下本76） 取トル（僧中52） 雨フル（法下65） 毎ツネニ（仏中24） 歇ツキヌ（僧中45）

七・へ永徽年中（二）禪定寺（二）兩り（ノ）僧有り 道祥惠悟と名づく。咸太白山中に隠る。祥（ハ）、即ち涅槃
を持誦（シ）。悟（ハ）即ち華嚴を持誦（ス）。松禾を服餌して。六時に禮懺し。晝夜に誦持す。年歳を積・有（ス）。
忽に一時に〔於〕、一居士を見る 鬢髮首二皓くシテ。衣る所潔素ナリ 儀容ト恢美ニシテ。前に來テ礼ヲ設く 庠
序トキテ〔而〕言はく。「弊・居ニ齋を設くるナリ一僧を請はんト欲へり」と、僧ノ曰はく「此トイハムに唯二僧
（アリ） 俱に往くこと可なりや、不ナリや」と。居士の曰はく、「弟子貧家なり 本と、一僧ヲ請ぜんト擬ふ」と。
僧ノ問はく「意に、交トイハム誰か行ト欲（へり）」と「華嚴の法師ヲ請はん」と云ふ。悟遂ヲ請に赴く 居士ハ隨
ひて行コト百餘歩可ト 居士、是に〔於〕身。空中に〔於〕騰リテ悟に問ひて曰はく、「師、何ぞ空に昇ら不る」と。
悟對へて曰はく、「貧道、翹無し 空に昇ること未だ得ず」と。居士悟に問ふ「師猶ほ未だ神通を得ざる耶」と。悟
答へて曰はく、「實に未だ得ず」と。居士、空從り却りテ下りキ 悟（ヲ）居士の衣襟中に〔於〕安致して坐せしむ。
又冥目せ令む。時に〔于〕、只耳ノ邊ハ、颺颺タル風ノ聲ヲ聞く。食・頃ノ半可（二）。還テ放（シ）テ地ヲ履む。
遂に目を開カ令むるニ處ニ到る力を知ら不。環テ視（レバ）唯大山見（ユ）。其ノ屋宇ヲ觀るに皆是れ湧出ノ悟を延
（セテ）堂ニ入り佛を礼せしむ。纔ニ畢るニ忽ト五百異僧の錫を執るヲ見る 盃を持して空を翔りテ〔而〕至ル。悟
異・僧ハ敬ひテ寧ぞ敢テ上にハ居（セムカ）。遂に下從り行く。居士來り語りて曰はく、「師華嚴をバ受持す 是れ佛
の境界タル。何ぞ小聖の下に〔於〕坐することを得んや」と。遂に却て悟を引く。五百聖衆の〔之〕上ニ〔於〕坐せ
（シム）。齋キの後。洗漱し已りテ、諸聖ハ便ち空ニ騰りテ〔而〕去りヌ。居士乃ち人を遣して、一の床ノ寶物ヲ擎ぐ

將に以て悟に觀ホドコ（ス）ハ 呪願を與へ令む 悟の曰はく「貧道來ること、地ニ由ら不。居士、携攝して此ニ至（レリ） 自迴ミラムカヘ（ルコト）得不爾ニ。請ト送、歸ヲ垂れ（ヨ）。經を誦して德を報ずるナリト 居士の曰はく「本、齋する所の意。師一人に在り。五百羅漢有ると雖も來りて食セズシテ。皆時に臨みて相ひ請ぜるのみ〔耳〕。師、且（ラク）呪願ヲ與へよ。當に即ち人ヲ發、遣シテ本、居に送、歸せ（シメム）。悟呪願ヲ與へ已る。達前二三五ノ童子有り 各六七歳なる可くガ居士之を呼ぶ 又重て名づけて一童子を〔於〕標す。遽力に來（レリ）。居士語りて曰はく、「汝此法師を衞ウヤ（キ）事（ハル）可し。」と 童子便ち悟に〔於〕請ひて曰はく、「師暫く口を開（ケ）」と 悟即ち依りテ開く。童子之を觀て云はく、「師甚だ病多シ」と。童子、即ち手ヲ將て身ニ向けテ上（ザマニ）摩づ（ト）。遂キヤマ（キ）少藥ノ大（キサ）麻子の如くニ取りて分ちテ三丸ト爲し悟に與へて之を吞ま（シメテ）。又「口ヲ開けよ」ト請ふ 童子、忽に飛びテ口ノ中ニ入りヌ 悟、當時、便ち虚に騰りて本の所、居ニ還り（ヌ）。空ノ中ニ住めバ祥ニ謂ひて曰はく、「向きに神仙に蒙がれて居士齋ヲ請けて遂に神通ヲ獲たり。今暫く蓬、萊金、闕紫、微等の宮ニ之きて。以て本業ヲ持、誦せんト欲ふ。」と 言ひ訖りテ祥ヲ辞して三衣、瓶、鉢、及び受くる所の經ヲ攝りて空に昇りて〔而〕去る。

皓シロシ（仏中103） 擬オモフ（仏下本78） 可ハカリ（仏上76） 衞ウヤマフ（法下2）

暫シハラク（法上88） 將モチ（仏下末8） 蒙カツク（僧上18）

八・顯慶年中に九隴山に、一尼師有り。佛乘。華嚴秘藏ヲ志精シテ山に入る 受持するコト、二十餘載。礼誦すること替り無し。教に依りて修行して性定。心寂。遂に慧眼を證し因陀羅網境界を得 十方世界微塵刹海九會道場了くに

鏡ノ中ノ像ノ如くに明見す〔焉〕。

九・總章元年に西域に三藏の梵僧有りて京洛に來り至る。高宗、師事し。道俗歸敬す。華嚴ノ藏公は、猶ほ童子に〔為〕シテ三藏ヲ頂礼し菩薩戒を受けんと請ふ。時（二）衆、三藏に白して言はく、「此童子は、華嚴大經を誦得し兼て其義を解レリキ」と。三藏驚き歎じて曰はく、「華嚴一乘は是れ諸佛の秘藏遭遇す可きこと難し。況や其の義に通ずるをや。若し人有りて華嚴淨行の一品を誦得せば其の人已に菩薩の淨戒具足を得ん」と。不受（二）後更に菩薩戒を受く。西域（ノ）傳記の中（二）説（カク）「人有り（テ）華嚴經を轉（ゼムトシテ）以（テ）手（ヲ）洗（フ）水の滴（リ）一の蟻（ニ）子（ニ）着（ヌ）。其の蟻命終して、忉利天に生（レタリトイヘリ）。而して況んや人有りて能く受持することを得る（ヲヤ）當に知るべし此の童子、後に〔於〕必ず當に廣大に饒益し、能く群生（ニ）無生（ノ）甘露ヲ施すべし」（ト云）。

白 マウス（仏中102） 解 サトル（仏下本8）

十 上生徒・元年中ニ洛洲ニ敬愛寺に僧有り 生緣鄭洲に在り 歸りテ所親ニ覲（タレ）奉らんとす。鄭洲の界ニ行き、及びテ。暮ニ店（ニ）家ニ宿るに。次に僧の來る有り、名号を知ら不 亦た店に投じ宿りて。前（ニ）來（レル）僧と〔與〕房を並べて安置す。其の後、來ノ僧、主人に謂ひて曰はく、「貧道、遠く（ヨリ）來りテ疲レ頓なりト、餓ユカワツカランキナリ乏シ。主人、酒有らバ三升酤ト。肉有（ヲ）バ一斤買（ハム）。資、直ヲ具、有（セリ）。請（フ）速ニ之ト致（セ）。遅ク至レること無かれ〔也〕」と。主人遽ニ請ニ依りテ辨コ。僧盡く之ト噉（レツ）。其の敬愛ノ律師怒りテ〔而〕之を訶す「身に法服を披。俗士に對ひて恣ニ酒肉ヲ噉ふ。慚愧ヲ知ら不。其の僧嘿して〔而〕答へ不。

初夜に〔於〕至り水ヲ索めテ口ヲ漱^ス（キ）。端、身ハ跌、坐して。緩ニ梵音ヲ發シテ大方廣佛華嚴經ヲ誦す。初二品題ヲ標^スウガ。次に如是我聞一時佛在摩竭提國寂滅道場ト誦するヲ。其の僧、口角の兩邊ニ、俱に光明ヲ發シ狀金色ノ若シ。聞（ク）者涙を垂レ。見る者發心す。律師、亦羨慕^{カミヤミ}ヲ生ずル。竊ニ自ら念じて言はく、「彼の酒肉の僧、乃ち能く斯の大經を誦せり。」と 三更ニ。至る比猶ほ經ヲ誦するを聞く。聲聲、絶え不るニ。四袂に滿たんト欲んトイハムニ。口の中ノ光明、轉じて更に増熾^{マズハ}り（ニシテ）。連字ニ〔於〕遍ちキ。孔陳ニ〔於〕透^{スエトホ}（リテ）兩房ヲ照、明（セリ）。律師初め是の光を知ら不るニ〔而〕去る、「彼の客、何ニ燈ヲ息^ヤ（メ）不シテ。主人ノ油ヲ損トイハム」と 律師因りて起きテ、廁（ニ）如^ユ（クニ）方ニ窺い見るに金色の光明。僧の〔之〕口の兩角自り〔而〕出づ。誦。五袂已上ニ至り。其の光漸く收るニ。却りテ僧の口に入る。夜、五更に、六袂を誦し終りテ。僧乃ち却て臥（ス）。須臾に天明ん（ト）。律師、涕泣して、〔而〕來りて、五體を地ニ投げ懺過を求哀す 「賢聖ト輕謗シツ願ヲ罪消滅シタマヘ」と。

頓 ヒタフル（仏下本23） 遽 スミヤカニ（仏上47） 辨 サタム（僧下65） 披 キル（仏下本50）

嘿 モタ（仏中61） 索 モトム（法中114） 標 スエ（仏下本102） 偏 ミツ（仏上58）

十一 儀鳳年中に。西域（ヨリ）二（リ）の梵僧有りて五臺山に至りテ草華ヲ齋^セ（チ）。香爐ヲ執りテ肘。膝ニて行步シテ山ニ向ひテ文殊大聖ヲ頂礼す 一尼師に遇ふ 巖石の間ニ在りテ、松樹の下繩ヲ床として上ヲ、端然トシテ獨キ坐シテ口ニ華嚴を誦すヲ時、景方ニ暮れテ。尼、梵僧ニモ謂ひテ曰はく、「尼、大僧ト〔與〕同、宿ハすること合（ハ）不^ス 大德且（ク）去りテ明日ニ更ニ來レ」と。僧の曰はく「深山路遙^{トホ}（ク）シテ投寄するニ所無し、願くハ遣

ハ見(ラ)不^スせよ」ト。尼ノ曰はく、「若し去ら不ハ某住む可から不^スニ。當ニ深き山ニ入べし」と。僧徘徊シテ慚(チ)懼れテ之^ヲ(ク)所を知ること莫し。尼ノ曰はく、「但前の谷に下(リヨ)。彼(コニ)禪窟有(リ)」と。「僧依りテ〔而〕住めハ」と。往きて尋ぬれハ果せるニ見トハ。禪窟相去(レ)ること五里餘なる可ナリ。二僧、一心ニ掌を合せテ。手ニ香爐ヲ捧て北ニシテ面遙に礼して心ヲ傾けて經ヲ聽く。耳ニ〔於〕ハ聆聆(リ)ノハ。乃ち遙ニ其ノ尼ヲ見レハ身繩床ニ處^キ(テ)面ヲ南にして〔而〕坐(セリ)。口中より光を放ち赫^{ナシ}(ル)コト金色ノ如シ。皎^{ヒツリ分明}前ノ峯ニ在リ經を誦すること兩帙已上、其の光盛ニシテ谷ノ南に〔於〕方圓十里ばかりなる可し、晝^{ヒル}(ト)〔與〕異ること無し。經四帙に至りて。其の光稍稍^{ヤヤ}、却(リ)收(マル)六帙ノ都て畢りニ至りテ。其ノ光、並ら尼の口ノうちに入る華嚴經菩薩住處品に云はく「震旦國の東北の方ニ菩薩の住處有り清涼山と名づく過去諸菩薩恒に中に〔於〕住す。今菩薩有リ文殊師利と名づく。万の菩薩と〔與〕俱なり。其山代山岱洲ノ南、折洲ノ東北^{キツ反}(ニ)在り。五臺山と名づく」と。首楞嚴三昧經に云はく「文殊は是れ過去平等世界の龍種上尊王佛なり」と又央崛摩羅經に云はく「文殊は是れ東方歡喜世界の摩尼寶積佛ナリ」と。後ニ神尼の〔之〕境界は、必ず文殊の〔之〕分化なりと、以て梵僧ニ示す也。

遙トホシ(仏上47) 却カヘリ(僧下110) 並シカシナカラ(仏下末29)

十二・垂拱ノ初ノ年に中天竺の三藏法師日照(トイフモノ)有り遠く、梵典ヲ將て此に來り傳譯す。高宗太原寺ニ詔して安置ノ。京城ノ大德の僧ヲ召し集めて共ニ大花嚴密嚴等十餘部の經ヲ譯さ(シム)。僧道成、薄塵、圓測、玄應、等證義し。復禮、思玄、等執筆し。慧智等譯語す。時に花嚴の藏公寺に在り因りテ翻譯ノ次でに三藏に問ひて

曰はく「西域に頗し一乗ヲ受持シテ感應ヲ獲たること有りや否（ヤ）」と。三藏の曰はく、「貧道、師ヲ尋シ、比南天に〔於〕至りし夜、一の寺ニ宿リシテ大徳六十餘僧有り。皆花嚴を誦すを業と為せり。文殊を以て上座ト為す。寺僧、亡モ者有れば花嚴經を誦得せる者ヲ以て次に其ノ處ニ補ヲ。毎二日ノ暮るるヲ以て來集シテ香ヲ焚き禮懺シテ各一卷の花嚴を誦し以て恒の准と為す。此寺二本と輪伽鳥ノ寶を捨キ之を造る。衆僧ノ花嚴經ヲ誦するニ縁（テ）其の鳥、遂ニ生天ヲ感ずれハ其の餘ノ感應、甚だ多シ。備ニ述ぶる可から不。

頗モシ（仏下本22） 捨オク（仏下本53） 備ツフサニ（仏上35）

十三・垂拱三年の四月の中、華嚴の藏公、大慈恩寺にして〔於〕花嚴經を講ずルニ寺僧の曇衍、講ノ主為（リ）。講散ジテ無遮會ヲ設、後ニ藏公、崇福寺ニ往シテ大徳成、塵の、二りノ律師ニ巡・謁ス。時ニ塵律師、藏公に報じて曰（サク）、「今ノ夏、賢安坊ノ中、郭ノ神高（トイフ）檀越、身死シテ七日ヲ經て却蘇シテ寺に入りて禮拜す。薄塵ヲ見テ自云はく、「傾忽トシテ暴に亡（シテ）。近く更に生を蒙（レリ）。時に當りて使者、三人有り。來リ追ヒテ、平等王ノ所に至り（ヌ）。罪福ヲ問ひ已リテ當ニ罪ヲ受（ク）合し使者をしテ地獄に引・送シテ付か令む。垂將ニ入らんと〔欲〕ス。忽ニ一ノ僧を見テ云はく、「我、汝ハ地獄之苦ヲ救はんト欲ふ。汝に一行の偈ヲ誦することを教へん」と。神高驚懼シテ僧ノ救護ヲ請ヌ「早く偈ノ文ヲ賜（ヘ）ト」。僧偈ヲ誦して曰はく「若人欲了知。三世一切佛。應當如是觀。心造諸如來」と。神高、乃ち志・心ニ此ノ偈ヲ誦すること數遍なり。神高、及び同（ク）罪ヲ受く合（キ）者、數千万人、此ニ因りて皆ノ離苦を得て地獄に入ら不。斯れ皆檀越ノ説く所ナリ。當に知るべし此ノ偈、能く地獄ヲ破し誠ニ思議ス（ハズ）。藏塵ニ答ヘテ曰はく、「此キ偈は乃ち花嚴第四會中の偈文なり」と。塵、初ハ是

レ花嚴（ナリトイフコトヲ）記さざりキ 猶ほ未だ全く信ぜず。藏公乃ち十行品ヲ索キテ檢（ヘ）看（タマフニ）果せるニ是十行ノ偈ノ中ノ最後の偈也。塵公歎きて曰はく、「纔に一偈を聞くに千万人一時二苦を脱するニ。況んや全部ヲ受持し講じて深き義ヲ通ずるをや〔耶〕」

合ヘシ（仏中一）

十四 垂拱三年に惠英比丘、藏公ニ從ヒテ慈恩寺に〔於〕座ノ下ニ花嚴を講ずるを聽（キ）已にしテ院を巡りて經行す。翻譯院ニ至る時、慈恩ノ弘志法師、楚國寺光法師と〔與〕、偕（トモ）（ニ）行く。藏公、諸德ニ謂ヒテ曰はく西域に勒那三藏法師有り 唐には實意と云ふ。花嚴を講ずるに聽衆數千なり。忽に二人有り 形貌端嚴ニシテ身光赫奕（タリ）大衆の前に〔於〕三藏を礼して曰はく、「弟子忉利天從り帝釋の使トシテ來（レリ） 法師ヲ天上ニ請シテ花嚴經ヲ講（セム）とナリ 願くハ即ち・行（カレン）ことを垂れ（ヨ）」と。三藏の曰はく「貧道、講猶ほ未だ畢はらず未だ相ひ隨がふ可からず。畢り（ナバ）即ち請に依（ラム）」と。使者の曰はく、「幾ノ時力當ニ畢るべし」と 三藏の曰はく、「猶ほ兩帙有るべし」と 使者の又云はく、「願くハ畢ヤ早ニ在レば當に更に親・迎（セム）」と。三藏許す 已りテ忽ちに即ち見ヘ不。講ノ終りに纔に經を收め了り（ナムト）欲（ルニ）及びて使者又來りテ時ニ當りて都講、梵音、維那等法師ト。高座の上に於いて一時に遷化す。使に隨ひて釋宮に〔於〕赴き（テ）大乘の深旨講讚しキ 當に知るべし 花嚴の秘藏は、天上人間ニ、宗（ギ）重（トバ）不る無しと

重タフトフ（法下42）

十五・天授元年、華嚴（ノ）藏公、祖母（ニ）覲（ミ）（エントシテ）歸る（ハ）曾洲（ソ反）に到（ル） 牧・掌、香華（ヨモチ）

郊迎す。二年(二)至り華嚴を講きたま(へト)請ふ説法の「之」次(二)議、邪正(二)及(プ)時(二)少道士有り(テ)側に在り歸り(テ)弘道觀主ニ報(ズ)「北寺の講師、道尊(ヲ)誹謗(シツ)」と觀主、之を聞き甚だ怒り(テ)明晨(二)諸(ノ)道士三十餘人(ヲ)領(ジテ)講所(二)來・至(シテ)面に、慍・色(ヲ)興(シ)口に、龐・言(ヲ)發シテ藏公(二)謂ひて曰はく「但自ら經(ヲ)講(ゼヨ)何の故に道門(ノ)事(ヲ)論ずるや」と。藏公(ノ)曰はく、「貧道、自ら華嚴(ヲ)講ず他(ノ)毀す(ルコト)を論ずる無し」と觀主問ひて曰はく、「一切諸法悉皆平等なるや〔耶〕」と。藏公對へて曰はく、「諸法亦平等。亦不平等なり」と。觀主又問はく、「何の法か平等。何の法か不平等なる」と。答へて曰はく「一切法、二種を出で不。一者真諦、二者俗諦なり、若し真諦に約せば此れ無く彼無し。自無く他無し。淨に非らず穢に非らず。一切皆離故に平等也。若し俗諦に約せば善有り惡有り。尊有り卑有り。邪有り正有り。豈平等を得んや〔耶〕。」と道士詞窮まり(テ)對ふ(ルコト)無し。猶ほ嗔解(ラゲ)不。如來(ノ)所(二)〔於〕毒害(ノ)言(ヲ)生(ス)觀に歸り(ヌ)、一宿(ヲ)經(テ)明朝(二)面を洗ふ手(ツカラ)眉髮(ヲ)約(ルニ)一時(二)俱に落つ。通・身(二)瘡痊(シヌ)。方に悔心(ヲ)生じ三寶に歸敬し。藏公(二)求哀し誓願(シテ)華嚴經を受持(シテ)一百遍(ヲ)轉、誦す。二年(二)向ふに猶ほ十遍有り未だ畢はらざる(二)忽に眉髮重(テ)生(ヒ)身瘡皆な愈ゆる(ヲ)感ずる(コト)曾洲の道俗、見聞かふる無し

約ヨリヘル(法中124)

十六・聖曆元年に、則天太后。于闐三藏、實叉難陀を詔請して大德十餘人與モ東都、佛授記寺に〔於〕華嚴を翻譯せ

しむ。僧復禮、文ヲ綴り。藏公筆授ス。沙門戰陀提婆等、譯語す。僧法寶、弘景、波崙、慧儼、去塵、等審、覆證、義す。太・史太子。中・舍。膺・福（ト）衛事恭參・軍、師・逸等于ノ、同ク共ニ翻譯す。則天、三藏大德等と（與）内ノ遍空寺に〔於〕親く法筵ニ御シテ序を製して刊定す。其夜、則天、夢み（タマフニ）天より甘露ヲ雨らすト見る。五更（ニ）至（ル）比（ハド）果シテ微キ雨有リト 香・水の〔之〕雨なり。又内苑ノ蓮ノ沼ノ中（ニ）〔於〕一莖。百葉の蓮華生ひ（タリ） 緑の枝紅（ノ）葩、香ニ艶ノ倫ニ超えたり。蓮花に三種有リ 一は人間華、十葉有リ。二は天上華、百葉有リ。三は淨土華、千葉有リ。今内苑ニ百葉生する二者明らかニ是レノ天華也。則ち天、此ノ翻譯ノ瑞應ヲ嘉みシテ。詔シテモ華ノ様ヲ出シテ中官ヲ使トシテ。佛授記寺ノ翻譯之所ニ向ニ送る。寺ノ僧衆舉キ、及び懷洲ノ大雲寺ノ什法師、在シテ悉く、同く觀觀シテ、希・奇敬・歎ス。聖曆二年十月八日ニ至りて。新經を譯し訖りぬ。藏公ヲ佛授記寺に〔於〕詔・請して此ノ新經を講ぜ（シムル）。華嚴世界品ニ至リテ講堂及ヲ寺院、地皆震動ス。衆舉リテ驚キ異（シブ）。都維那慧表、僧弘景等。狀ヲ連ねて、聞奏す。勅・批ニ云はく、昨微言ヲ敷演し。秘・輔ヲ弘揚す。初譯シたる〔之〕日ハ、甘露ヲ夢み以て祥ヲ呈ス。講ヲ開く之晨ニハ地動ヲ感シテ〔而〕異を標すニ。斯れ乃ち、如來ノ迹を降ヲ、用ちひて九會之文ニ符（ヘリ）。豈朕力庸虛ならんや、敢て六種之震ニ當（ラムヤ）。來狀ヲ披覽ステ欣・暢兼・懷（セリ）。

微スコシキ ウルハシキ（仏上38） 異アヤシム（仏中111）

十七 聖曆年中に于闕ノ三藏實又難陀、佛授記寺に〔於〕華嚴を翻譯す。藏公に向ひて曰はく、「本國ニ沙弥有り弥伽と名づく 十戒ヲ薄・持シテ 未だ受・具せずと雖ども身意清淨ニシテ惠華嚴を誦す（ナリ） 一日ノ中にして

〔於〕二りノ使者有り作礼を至^スシテ。狀貌偉麗ニシテ身ニ光明有り。弥伽、怪異シテ所ニ從に來るヲ問ヒテ使者對ヘテ曰はく、「弟子、切利自り降りテ帝釋ノ使トシテ來ノイハム。師ヲ請フ華嚴經ヲ誦せよト願クハ即ち行ヲ垂れよ」と。伽の曰はく、「未だ審らかならず。天帝何ニ縁リテ命ぜ見れテ〔而〕經を誦せしむトシテや〔耶〕。」と。使者ノ曰はく、「帝、修羅と〔與〕時キ戰ヒテ。毎ニ凌・迫セ被ル。帝、天眼を以テ閻浮ヲ觀・視シテ。念誦ノ加護ヲ求めんと欲ふ。縱（ヒ）羅漢有りトモ未だ斯の事ヲ辨ぜず。唯シ法師ノ專（ラ）華嚴ヲ精ニシテ心ヲ佛境に遊ビシ人天の福田ト爲す可きを見テ。所・以に迎へ見るのみ〔耳〕。」と。師ノ曰はく「貧道、必ず能ク饒益する所有れハ。豈敢テ辭せんや〔耶〕。」と。是に〔於〕請を受け。目ヲ閉ジテ俄^{トハカリ}傾ニ便チ天宮ニ至リ（ヌ）。帝釋憙^トビテ曰はく、「毎ニ修羅ニ擾を見セ被るる故に師ヲ屈して來ら（シム）。師華嚴を受持すれば諸天護持シ。善神影衛ス。請ヌ爲ニ經ヲ誦ル以テ彼ノ敵ヲ禳シテむや帝釋即ち天冠ヲ脱ぎテ虛空に〔於〕擬スルニ忽・然として殿堂ヲ化出（シツ）。七寶所成、四門八牖。摩尼衆寶之所莊飾せり。繪ヲ、幡蓋を懸け。間に華香を列ね、以て供養を爲し。殿に入れ（ト）請ヘル蓮花座に坐せ（シメ）華嚴經を誦せ（シム）。經聲、寥・亮トシテ遍ク天宮ニ徹（シテ）帝釋。即三十三天を領^{ヒキ}（キ）四兵侍衛シ万衆圍遶シテ寶臺に〔於〕坐シテ空ニ乗ジテ〔而〕、向キニ其ノ闕ふ所ニ行（キ）脩羅^{邪カ}運衆此の威靈ヲ觀テ即便チ退^シ（シヌ）。徒・侶潛^シれ、藕ノ孔ノ中ニ〔於〕竄^カ（レシメ）帝釋却テ師ヲ天宮ニ請シテ供養す。施すニ七珍異、寶を以てすれバ。帝釋又師ニ白シテ言はく。「若し長生の〔之〕藥ヲ須ふれば亦當ニ上ニ奉るべし。請レ、天宮ニ住シテ辭せ見るコト無レとなり〔也〕。」と。師の曰はく「愛ヲ割キテ家を出で無上道を求む。世間ノ珍異、及び長生ノ事ハ志ニ所ニ非ラズ」ト〔焉〕。帝釋是に〔於〕五體投地して一ノ心に頂礼シテ曰はく「願はくは、菩提を

成ずる時、誓ひて相（ヒ）濟・脱（ス）べし棄二・遺（ラル）、〔見〕こと莫かれ迺ち使ヲ遣して閻浮ニ送りて還ら（シム）所・有ノ衣服、皆天香ニ終身染みテ滅（セ）不。後ニ終ニ淨土ニ生（キ）ることを願ひテ實又三藏、具ニ此ノ沙弥を識れり者（ヘリ）矣

十八・聖曆年中于閻三藏、實又難陀云はく、龜茲國（ノ）中（ニハ）唯小乗を習ひ（テ）釋迦（ノ）分化ノ百億種種身雲（ヲ）現ずる新なる〔也〕境界（ヲ）示す（コトヲ）知ら不 華嚴大經（ヲ）信ぜ不 梵僧有り 天竺從り華嚴（ノ）梵本を將（チ）其ノ國ノ中ニ至（レリ）小乗師等、皆信受する（コト）無け（レバ）梵僧、遂（ニ）經（ヲ）留め（テ）〔而〕歸（ヘリヌ）、小乗（ノ）諸師、迺ち以て經（ヲ）井に〔於〕投（ゲ）棄（ツ）經、井（ノ）中に於（テ）光（ヲ）放ちて赫く（コト）火を聚めたるが如し 夜、諸師、之を覩て疑（ヒ）謂（ラク）金寶（カト）。明（ニ）至り（テ）集（リ）議（シテ）人（ヲ）使（シテ）之を灑（ハシ）む 乃ち是（レ）前（ニ）棄つる所（ノ）華嚴經也。諸師稍（シ）驚異（ヲ）為（シテ）遂（ニ）却り（テ）經藏（ノ）中（ノ）龕（ニ）収（メ）歸（シテ）安置す。他日、忽ち梵本（ヲ）見（レバ）其（ノ）藏内（ノ）最上（ノ）隔（ニ）在り 諸師、念・言（ラク）此（ハ）我（ガ）釋迦の所説に非ずや〔耶〕。吾見（レバ）少異有（リ）乃（チ）藏の中に收め入れテ何二人しテ輒（ク）將ちテ此（ノ）上（ノ）隔（ニ）向（ニセム）又梵本（ヲ）以て下（ノ）龕に〔於〕置（ツ）僧衆、躬（カラ）藏（ノ）門（ヲ）鑰（ス）自ら、鑰鉤（ヲ）掌ル 明くる日（ニ）藏（ヲ）開き（テ）還（テ）華嚴（ヲ）見（レバ）其（ノ）上隔に在（リ）諸師方（ニ）一乘大教の威靈は此の如（シ）と悟り（テ）慚悔追責（シテ）信・慕漸（ク）生れ（ヌ）〔矣〕。

将モツ(仏下末8) 迺スナハチ(仏上48) 謂オモフ(法上49) 明アス(仏中87) 稍スコシ(法下14)
 十九・證聖年中に、華陰^{火反イン}ニ鄧元英^{トウ エイ反 有本名 元爽}一り(ノ) 親・故有り 忽(ニ) 時・患(ニ) 染(シテ) 死(シテ) 七日
 (ヲ) 經(タリ) 却・穌(シテ) 元爽^{元爽}(ニ) 謂ひ(テ) 曰はく、「冥道(ノ) 官ニ見みえん(トシテ) 吏ハ將(ニ) 君(カ) 父(ヲ) 追ふニ文・案、成らむ(トナム) 欲む(トス) 急(ニ) 功德を修して以て之に禳(ヘ)よ」と。
 元英、驚懼し(テ) 曰はく、「何の功德をか修して〔而〕疾く免かるることを獲んや」と 彼(ノ) 人(ノ) 云はく、
 「急ぎ大華嚴經一部を寫せ(ヨ) 若(シ) 大期ヲ遅くせ(バ) 遠から不(ジ)」と。元英、乃ち遽(ニ)、市(ニ) 紙
 (ヲ) 買(ヒ) 隣寺(ノ) 伏禪師(ノ) 院に向(ヒテ) 禪師(ヲ) 請ひ(テ) 與(テ) 多(ク) 經・生(ヲ) 召し
 (テ) 如法(ニ) 護淨(シテ) 一時(ニ) 書寫(ス)。未だ旬日(ヲ) 逾^コ(エ) ず 經、已(ニ) 周・畢す。齋(ヲ) 辨じ(テ) 之(ヲ) 慶(ス)。後に〔於〕遂(ニ) 斯(ノ) 厄(ヲ) 免かれ(ヌ)。元英、仍ち母(ノ) 服(ナル) に
 依り(テ) 哀・切懷に在(リ) 其(ノ) 冬(ノ) 十一月中母(カ) 墳・所に〔於〕至(ルニ) 舊種へし蜀(ノ) 葵^{アヲヒ}、
 寒・枯の〔之〕莖(ニ) 忽(ニ) 華葉を生(ジテ) 芳薤^{シキ反}榮艷セリ。五彩、英(ヲ) 含(メリ)。斯(レ) 蓋(シ) 寫經の〔之〕感なり〔也〕。羽縣之を以て聞奏す。則天、嗟異(シテ) 立孝門を賜ひ(テ)。降(スニ) 旌^{ハタ}・表^セ(ヲ) 勅(ス)。

急タチマチ(法中84) 禳ハラフ(法下4) 舊モト(法下43) 種ウフ(法下19)

甘 如意元年に降洲に、二りの童女有り。皆性ト・識リ靜にしテ・正テ(ナリ)、眇・年(ニ) 師・姑^コ・姑^コ(ニ) 依り
 (テ) 華嚴經を誦す 三十餘卷を得。師、姑、戒行精苦セリ、常に華嚴を誦すを業と爲す。二女に教へて剃・度(ヲ)

得令めんと欲す 幾無く（シテ）師・姑、忽、然として端坐〔而〕（シテ）終り（ヌ）。二女朝々（ニ）墳所（ニ）詣（イテ）號・泣す、三年を〔於〕經（テ）墳（ノ）上（ニ）忽（ニ）紅蓮五莖生じ（タリ） 二女、華（ノ）感異（ユ） 觀益（ニ）以（テ）號・慕す。忽ちに一りの梵僧を見（レバ）、神儀甚だ偉（シウシテ）來り（テ）女（ニ）問ひて曰はく、「汝何（ゾ）哀・號是の如く（ナル）」と 女、對へ（テ）曰はく「和尚の所（ニ）〔於〕（シテ）華嚴（ユ）誦習（シ）出家（ユ）志・求（セシニ）圖（ヲ）不（ルニ）感無く師・姑早く喪ひ（シカハナリ）」と。僧の曰はく、「汝既に能（ク）懇（ロニ）剃落（ユ）求（ム）何（ゾ）果さざる（コトヲ）憂（ヘム）」と。僧乃ち懷・中〔於〕（ヨリ）一（ノ）軛像（ユ）、方圓、六七寸（ナルヲ）出（シテ）以て二女（ニ）授け（テ）〔而〕之に告げ（テ）曰は（ク）「汝此（ノ）像を家に〔於〕（シテ）將（テ）供養（セバ）久しから不當（ニ）出家（ユ）獲（テム）」と。女像（ユ）得已り（テ）、梵僧（ユ）礼謝して少・須（ニ）忽、然（トシテ）見え不。女即ち將（ニ）家（ニ）歸り如法（ニ）供養す。精懃信敬して。一心に怠ること無（シ）。其（ノ）像方圓、日（ハ、クニ）長ずる（コト）一寸。十日の間（ニ）、日（トシテ）長ぜざる無し 後（ニ）丈餘（ニ）至り（ヌ）洲、縣、之（ヲ）知り（テ）兼テ檢が（ヘ）、覆（シテ）華ニ聞奏す。則天、之を異し（ムデ）詔して二女を遣はし華を兼せしむるに根莖同じく入れり。墓を發きて華を取る。乃ち見（レバ）華（ノ）莖（ハ）棺を秀（トホリテ）〔而〕出（タリ）。棺を破（リテ）根を取る 根（ハ）師・姑ノ舌ヨ上自（ヨリ）〔而〕生（タリ）。光彩、鮮艷（ニシテ）洲縣同じく見る。二女京に至る 召し（テ）内（ニ）入れ 則天自ら手づから刀を執りて落髮せしむ。并に三衣瓶鉢等を賜ふ 俱に天女寺（ニ）配（シテ）此（ニ）因りて便ち勅を天下（ノ）諸寺に出（シテ）各僧尼三人を度（ス）。

發ヒラク(僧下107)

廿一・大足年中に楊洲大雲(ニ)僧弘寶(トイフモノ)有り儀・兒美(ニシテ)誦・經(ニ)善(ナリ)毎(ニ)自ら侍(シテ)人「於」(ヲ)懷(ス)忽・然(ニ)一・日(ニ)眉(ノ)上、鬢の下(トニ)、一(ノ)瘤・瘰^{セン反}出(デキヌ)其の大き(サ)桃(ノ)如(シ)旬日の「之」間漸く長する(コト)三寸・餘なり。其の僧之を恥ぢて房門(ヲ)出で不。寺に「於」(シテ)醫療す(ルニ)日(ニ)更(ニ)増(ヌニ)甚(シ)。因り(テ)自(ヲ)思惟す(ラク)。此(ノ)疾(ニ)二の因縁有り一は則ち過去の業感なり。二は見・在(ニ)賢聖(ヲ)輕・慢す(ルニ)由り(テナリ)。遂に即ち願を發して其房の中に「於」(シテ)華嚴經、一百遍(ヲ)轉讀し晝夜(ニ)香華(ヲモテ)精・懇禮懺す。經を轉ずること、六十遍(ニ)至り夜(ノ)中(ニ)忽に夢に人有り來り(テ)之に語り(テ)曰は(ク)「汝病(ヲ)愈や(サムト)欲(ハヅ)吾(レ)汝(ガ)與(ニ)醫(タラム)、手を以て刀を執り其(ノ)瘰を截^キ(リ)却^サ(クトミル)便ち「於」、驚き・覺め(ヌ)明(クルニ)至り(テ)具(ニ)諸僧(ニ)向て廣く説く。是に「於」瘰(ノ)上(ニ)瘡生^{イデ}(タリ)瘡(ノ)中(ヨリ)膿出^{ウミシルイ}(ツ)一月「於」(ヲ)經(テ)其の疾全て瘡^イ(エヌ)。亦た瘡盤(モ)無(シ)楊洲(ノ)僧・筠洛^{クイン反}に入りテ具ニ此事ヲ以て華嚴藏公ニ「於」説ク

廿二 西京崇福寺の大德慧招法師、或は慧祐(ト)云ふ。華嚴藏公の「之」同學なり「也」。學行、精苦(ニシテ)。小(ウ)自(ヨ)儼和尚(ニ)師・事(ス)專(ヲ)華嚴を業(トシテ)偏(ニ)性起一品三卷(ヲ)誦(ス)新譯(ニハ)如來出現品と名づく。以て恒業と爲す。其の僧、靜(ヲ)好み崇福寺(ニ)居ら未(リシ)、已・前(ニ)

久(ク)禪誦(シテ)山(ニ)在(リキ) 毎(ニ)靜夜に〔於〕洗^{スガ}漱^反焚^反・香^京(シテ)繩床に〔於〕坐して〔而〕斯ノ品ヲ誦す。忽に一夜に〔於〕正ク經を誦すル時ニ〔而〕十餘の菩薩有りて地從り踴出シ。蓮花臺(ニ)坐す 身の相金色(ニシテ)光明赫然(タリ)。掌を合せ跪(テ)〔而〕經(ヲ)聽^キ(ク) 經を誦すること纔^{即也}に終(レバ) 便ち沒(シテ)見え不^ズ。慧紹、密(カニ)藏公(ニ)向かひ(テ)自(ラ)此(ノ)靈感(ノ)事(ヲ)說(ク)藏公轉(ヘテ)、門人慧諒、慧雲、玄觀、如琮^{シヨ反}等(ニ)向かひ(テ)〔而〕之を説く〔也〕。

廿三・永徽年中(ニ)定洲^{テイ反}(ニ)禪師有り 修德と名づく。學徒數万あり。禪の〔之〕領^{レイ}・袖^{シウ反}なり〔也〕。而て専ら華嚴を業とし斯(ノ)經(ヲ)寫(シテ)敬ひて宗^{タツト}(ブコトヲ)為さんと欲ふ 故(ニ)先づ沈香を以て水(ニ)漬^{ヒツ}(シテ)〔而〕楮・樹(ヲ)種(ヘツ) 樹大に〔ナレハ〕皮(ヲ)取り(テ)紙を造り(テ)〔而〕用ひ(テ)經を寫(ス)。經・生筆・匠、造紙等、三人、大小便(シテハ)並に皆洗浴(シ)護淨(セシム)。一卷了(ル)毎(ニ)施(ニ)十縑を以て(ス) 裝染固・畢(シテ)齋(ヲ)設けて慶讚(ス)。香(ノ)函(ニ)之(ヲ)盛^イ(レテ)志心(ニ)禮拜す。齋(ヲ)設け(タル)日(ニ)當(テ)道俗雲の〔ゴトクニ〕趁^{ワシ}(ル)。初(テ)函を開く(ル)時(ニ)金光遠(ク)照(シテ)百餘里に徹(ル) 山・東(ノ)五十餘洲、皆來り(テ)經を礼(ス) 開・外^{火イ反}(ノ)道俗聞き・知ら不といふこと無し。

徹イタル(仏上39)

廿四・時に闍人有り 劉(ノ)、謙之、北齊第三王子の〔之〕從者なり〔也〕。齊の太和年中(ニ)王子身を燒き以て文殊菩薩(ヲ)供養す。謙、自・薄殘・缺(ニシテ)乃ち發心(シテ)五臺山(ニ)住して専ら花嚴を業とし晝夜受

持し。六時に礼懺す。頻(リニ) 歳時(ヲ) 歴(ルニ) 精懇懈る(コト) 匪(レ) 乃ち文殊の加護(ヲ) 感(ジテ) 忽・然(ニ) 鬚鬢自(ラ) 生(ヒ)。根體具備(ハレヌ)。聲韻雅朗(ニシテ) 人(ノ) 之(ニ) 及(ハ) 妙(ナシ) 既に形・鬚復(シテ) 單(ヘニ) 懇(ニシテ) 彌志(サス) 洞(ニ) 經旨(ヲ) 曉(リテ) 乃ち華嚴論六百卷(ヲ) 製す

洞 ホカラカニ(法上²)

廿五・幽貞、竊(ニ) 聞(ク) 西、薩遮の俱槃国(ノ) 山中(ニ) 下本。一十万偈を具足する。不思議解脱大方廣佛華嚴經有(ス)。唯だ願(ハ) 此(ノ) 經、早(ク) 具足(シテ) 此(ノ) 土(ニ) 傳證することを得て普(ク) 一切の有情(ヲ) 利せん(コトヲ)。幽貞、有・唐(ノ) 建中(ニ) 癸亥^{キカイ}の紀^{トキ}(ヲ) 以て敬ひて此(ノ) 願(ヲ) 發し此(ノ) 歸命文(ヲ) 為^{ツク}リテ諸(ノ) 礼佛の時に(於) 次(デニ) 十二部經(ニ) 及びて(而) 之(ヲ) 礼す 佛(モ) 佛(ヲ) 礼せざる時(ニハ) 此(ノ) 歸命(ノ) 文(ヲ) 念・持(ス) 華嚴不可說刹海微塵數偈品有(リ) 豈貝葉(ノ) 能(ク) 傳寫する所(ナラムヤ) 皆諸の大菩薩陀羅尼力の(之) 記持する所(ナリ)。海雲比丘(ノ) 受持(スル) 所(ノ) 經は、大海量の墨、須弥山聚の筆を以て一品を書寫するとも猶ほ少分(ヲタニモ) 窮むる可から不^ス。龍樹祖師、龍宮(於) (ニシテ) 文字結集し所傳する(之) 經(ヲ) 見(タマフニ) 上中下三本有り 上本(ニハ) 十箇三千大千世界微塵數(ノ) 偈、一四天下微塵數(ノ) 品有り。中本(ニハ) 四十九万八千八百偈一千二百品有り。下本(ニハ) 十万偈四十八品有り。其の上中の(之) 本(ハ) 亦だ閻浮人^{シエン反}、力能^{リヨク反}(ク) 受持す可(キニ) 非らず 所、以に西域(ニ) 唯下本十万偈(ノ) 經有り。今彼(ノ) 国(ノ) 山中(ニ) 在^{イマ}(ス) 此土(ニ)

譯す所は八十卷（ノ）經、梵偈（ニハ）唯^タ十萬中に〔於〕四萬五千（ナリ）乃ち略出のみ〔耳〕。幽貞、此（ノ）土（ノ）經、猶ほ未だ具はらざるを悲む（ガ）故（ニ）廣（ク）是（ノ）願（ヲ）發（シテ）此（ノ）傳（ニ）附・出（ス）。蓋（シ）諸道（ノ）者（ヲ）勸め（テ）之を見（テ）皆同（ク）礼・念・哀・請（ジテ）下本の經（ヲ）具足（シテ）早く此ノ土（ニ）傳（ヘムト）欲するなり〔也〕。傳（ノ）中（ニ）僧（ノ）教（ヘシ）所（ノ）檀越、神亮（ガ）誦偈（ハ）是れ前（ノ）所譯の經本なり〔也〕。後譯（ノ）偈（ニ）言は（ク）若人欲了知 三世一切佛 應觀法界性 一切唯心造と。

廿六・上元年中（ニ）孫（ノ）思^{白辰}・邈^ト流珠丹、雲母粉（ヲ）服（シテ）年（シ）、一百五十歲、顏（ハ）處子（ノ）如（シ）長安（ニ）至りて齊^セ魏^ト（ノ）間（ノ）事（ヲ）説く（コト）目（ニ）覩（ルガ）如く有り 此經を書寫する（コト）七百五十部なり。太宗、佛の經（ヲ）讀まんと欲（シテ）邈（ニ）問（フ）「何（ノ）經（カ）大（ナリト）為（ル）」。邈（ガ）云はく、「華嚴經、佛（ノ）尊ぶ所大（ナリ）ト」。帝（ノ）曰（ハク）「近^{コノ}玄奘三藏大般若六百卷を譯せり 何ぞ大と為さず（シテ）〔而〕八十卷華嚴經、獨り大なる（コト）を得るや〔乎〕」と。邈答（ヘテ）云はく、「華嚴法界（ニ）一切の門を具ふ一門の中に〔於〕大千經卷（ヲ）演出す可し 般若經は乃ち是れ華嚴（ノ）中（ノ）一門（ナラク）〔耳〕（ノミ）」と。太宗方（ニ）悟（テ）乃ち華嚴一乘秘教（ヲ）受持（シタマフ）亦大不思議解脱經と名づく。功用大なる（ガ）故ニ感應亦大なり。

^{法助文也}へ道者は、佛心（ヲ）學ばんと欲し佛境界を慧りテ了り。佛地位を證し。此一乘（ノ）法性悔に依りて〔而〕修行者は、地位を歷不 初發心の時、便ち正覺を成じ悉く三世の諸の如來と〔與〕等し。譬へば衆流（ノ）一滴の〔之〕水、

纔に海中に入れば即ち海水と名づくるが如し。若し大乘（二）。二乗權教に依（レバ）備ふるに萬行を修し多劫を綿歷して。是の經を聞きて少き方便を以て疾く菩提を得ることを知ら不。經に云はく、「此ノ經（ハ）一切衆生之手に入ら不。唯だ菩薩摩訶薩を除き（下へバ）一切の聲聞緣覺は此の經を得不。何に況んや受持せ（ムをや）。若し菩薩億那由他劫（二）六波羅蜜を行（ズルスラ）此（ノ）經を聞か不。聞くと雖も信ぜ不。是等猶ほ假に名づけて菩薩と爲す。若し經卷有る地は、如來の塔廟なり。禮拜供養せば、彼の衆生等（ハ）善根を具足し煩惱の患を滅し。賢聖の樂を得ん。吾（ガ）徒其（レ）之ヲ勉^{ハゲ}メ」と予、禪祖、無名公（二）師事^{ツカヘ}（シテ）側（カニ）「普賢大行海印深定法界體性」（ヲ）聞く 方に華嚴は釋氏の宗極なる（コトヲ）知る 所、以に此（ノ）傳（ヲ）刊・修（シテ）廣く未だ聞かざるニ示す〔也〕。

慧サトリ（法中69） 側 ホノカニ（仏上23）

華嚴感應傳一卷

雍熙參年畔月 日大宋兩浙台洲使院董乍祿書す

一點了りぬ

一校了りぬ

声の点一覧

漢字…位置(丁・行・説話番号)…声点…広韻韻類・反切、又音(一は記事のない事を示す。)

浮…1才・4・序…平聲…下平十八尤・縛謀切

詞…1才・4・序…平聲…上平七之・似茲切

數…2才・3・一…上聲…上聲九麤・所矩切、又所句、所角二切・去聲十遇・色矩、色角二切、又音速…入聲四覺・一

百…2才・3・一…入聲…入聲二十陌・一

里…2才・3・一…上聲…上聲六止・良士切

魏…2才・5・二…去聲…去八末・魚貴切

朝…2才・5・二…平聲…下平四宵・陟遙切、又直遙切

并(ヘイ)…2才・5・二…平聲…下平十四清・府盈切…去聲四十五勁・一

玄…2才・6・二…平聲…25才・1・二十二…去聲…下平一先・胡涓切

旨…2才・6・二…去聲…上聲五旨・職雉切

請(セフ)…2才・6・二…去聲…下平十四清・在性、七井二切…上聲四十靜・七靜切、又疾盈、疾姓二切…去聲四十

五勁・秦盈、親井二切

益(エキ)…2才・6・二…入聲…入聲二十二昔・伊昔切

克(キヨク)…2ウ・1・二…去聲…入聲二十五德・一

誠(セイ)…2ウ・1・2…平聲…下平十四清・一

縣(ク)…2ウ・4・2…入聲…下平一先・一…去聲三十二霰・黃練切

瓮(コシ反一竟反)…2ウ・4・2…上聲…去聲一送・烏貢切

山…2ウ・4・2…平聲輕…上平二十八山・所間切

東…2ウ・5・3…平聲輕…上平一東・德紅切

晉…2ウ・5・3…去聲…去聲二十一震・即刃切

精…2ウ・6・3…平聲…下平十四清・子盈切…去聲四十五勁・音旌

志…2ウ・6・3…去聲…10才・7・八…入聲…去聲七志・職吏切

西…2ウ・7・3…平聲…上平十二齊・先稽切

來…2ウ・7・3…平聲…上平十六哈・落哀切

京(ケイ)…3才・5・3…平聲…3ウ・1・3…平聲輕…下平十二庚・一

師…3才・5・3…平聲輕…上平六脂・疏夷切

城(セウ)…3ウ・1・3…平聲…下平十四清・一

建…3ウ・4・3…去聲…26才・3・二十五…平聲…去聲二十五願・居万切

業(ケフ)…3ウ・4・3…入聲…入聲三十三業・魚怯切

青(セイ)…3ウ・6・3…平聲輕…下平十五青・倉經切

衣(イナルモノ)・・・3ウ・6・三…平聲…上平八微・一…去聲八末・於既切

呉・・・4才・2・三…平聲…上平十一模・一

郡・・・4才・3・三…去聲…去聲二十三間・渠運切

太・・・4才・3・三…去聲…18才・2・十六…平聲…27才・7・二十六…上聲…去聲十四泰・一

守・・・4才・3・三…上聲…上聲四十四有・一…去聲四十九宥・一

孟・・・4才・3・三…去聲…去聲四十三映・莫更切

覬(カイ)・・・4才・3・三…去聲…去聲六至・一

右(イウ)・・・4才・3・三…上聲…上聲四十四有・一…去聲四十九宥・于久切

衡(クカイ)・・・4才・3・三…去聲…下平十二庚・一

將・・・4才・3・三…平聲…下平十陽・即良切、又子諒切…去聲四十一漾・一

軍・・・4才・3・三…平聲…上平二十文・一

元・・・4才・4・三…平聲…上平二十二元・愚袁切

熙・・・4才・4・三…平聲…上平七之・一

永・・・4才・4・三…上聲…上聲三十八梗・于憬切

初・・・4才・4・三…上聲…上平九魚・楚居切

費・・・4ウ・7・四…去聲…去聲六至・一…去聲八末・芳未切、又房未、冰備二切

憎（モウ反）… 6才・2・四… 去聲… 上一董・一… 去聲四十八嶝・武亘切

齊（サイ）… 6才・6・五… 上聲… 上平十二齊・徂奚切… 去聲十二霽・一

慧… 6才・6・五… 入聲… 去聲十二霽・胡桂切

炬… 6才・6・五… 去聲… 上聲八語・一

棗（ナツメーサウ）… 7才・1・五… 上聲… 上聲三十二皓・一

樊… 7才・4・六… 平聲… 上平二十二元・一

李（リ）… 7ウ・1・六… 去聲… 上聲六止・一

居… 8ウ・1・七… 平聲輕… 上平七之・一… 上平九魚・九魚切

微… 10才・5・七… 平聲… 上平八微・無比切

精（セイ）… 10才・7・八… 平聲… 下平十四清・子盈切… 去聲四十五勁・子姓切、又音旌

酒… 11ウ・6・一〇… 上聲… 上聲四十四有・子酉切

肉（シタ）… 11ウ・6・一〇… 入聲… 入聲一屋・如六切

儀… 12ウ・5・十一… 上聲… 上平五支・一

鳳… 12ウ・5・十一… 平聲… 去聲一送・憑貢切

岱… 13ウ・5・十一… 平聲… 去聲十九代・一

折（キン反）… 13ウ・7・十一… 平聲輕… 上平十二齊・一… 入聲十七薛・常列切

垂.. 14才・3・十二.. 平聲.. 上平五支・是以切

拱.. 14才・3・十二.. 平聲.. 上聲二腫・居悚切

傳.. 14才・4・十二.. 去聲.. 下平二仙・持恋切、又丁恋切.. 去聲三十三線・直恋切、又直專、丁恋二切

賢.. 15才・2・十三.. 平聲.. 下平一先・胡田切

安.. 15才・2・十三.. 平聲.. 上平二十五寒・烏寒切

坊.. 15才・2・十三.. 上聲.. 下平十陽・音方・音房

院.. 16才・2・十四.. 去聲.. 上平二十六桓・一.. 去聲三十三線・一

講.. 16才・6・十四.. 去聲.. 上聲三講・古項切

曾(ソ反).. 16ウ・5・十五.. 平聲輕.. 下平十七登・音層・作滕切

聖.. 17ウ・6・十六.. 平聲.. 去聲四十五勁・式正切

曆.. 17ウ・6・十六.. 去聲.. 入聲二十三錫・一

史(シ).. 18才・2・十六.. 上聲.. 上聲六止・踈士切

子.. 18才・2・十六.. 平聲.. 上聲六止・即里切

中.. 18才・2・十六.. 平聲輕.. 26才・3・二十五.. 平聲輕.. 上平一東・陟弓切、又陟仲切.. 去聲一送・陟仲切、又陟

沖切

舍.. 18才・2・十六.. 去聲.. 上聲三十五馬・音赦.. 去聲四十禡・始夜切

膺(キヨウ)…18才・2・十六…平聲…下平十六蒸・於陵切

福…18才・2・十六…入聲…入聲一屋・方六切

衛…18才・2・十六…平聲…去聲十三祭・于歲切

事…18才・2・十六…平聲…去聲七志・鉏吏切、又側吏切

欣…19才・2・十六…平聲輕…上平二十一欣・許斤切

暢…19才・2・十六…入聲…去聲四十一漾・一

峴(シン)…20才・6・十七…平聲…入聲一屋・尼六切・音肉

長…20才・7・十七…平聲…下平十陽・直良切、又直向、丁丈二切…上聲三十六養・知丈切、又直張切…去聲四十一漾

・直良切

珍…20ウ・2・十七…平聲輕…上平十七眞・陟鄰切

鄧(トウ)…21ウ・4・十九…平聲…去聲四十七證・徒巨切

元…21ウ・4・十九…平聲…上平二十三元・愚表切

英(エイ反)…21ウ・4・十九…平聲…下平十二庚・一

意…22ウ・1・二十…平聲…去聲七志・於記切

降…22ウ・1・二十…平聲…上平四江・古巷切…去聲四絳・音卸伏也

洲…22ウ・1・二十…平聲…下平十八尤・一

落…23ウ・1・二十…入聲…入聲十九鐸・慮各切

髮…23ウ・1・二十…入聲…入聲十月・方伐切

癭（セン反）…23ウ・4・二十一…入聲…上聲四十靜・於呈切

雲…25オ・1・二十二…去聲…27オ・5・二十六…平聲…上平二十文・王分切

觀…25オ・1・二十二…平聲…上平二十六桓・音灌・去聲二十九換・音官

琮（衆反）…25オ・1・二十二…上聲…上平二冬・一

外（火イ反）…25オ・1・二十三…平聲…去聲十四泰・五會切

上…27オ・5・二十六…去聲…上聲三十六養・時掌切、又音尚…去聲四十一漾・時兩切

元…27オ・5・二十六…平聲…上平二十二元・愚表切

思…27オ・5・二十六…去聲…上平七之・息茲、又息吏切…去聲七志・音同

邈（白反）…27オ・5・二十六…入聲…入聲四覺・莫角切

流…27オ・5・二十六…平聲…下平十八尤・一

珠…27オ・5・二十六…入聲…上平十虞・一

丹…27オ・5・二十六…平聲…上平二十五寒・一

母…27オ・5・二十六…去聲…上聲四十五厚・莫厚切

粉…27オ・5・二十六…平聲…上聲十八吻・方吻切

宗…27オ・7・二十六…上聲…上平二冬…作冬切

『広韻』は『新校宋本広韻』（二〇〇一年、台湾、洪葉文化事業公司）の版本影印によった。

参考点図	群	位 置	1	2	3	4
						
妙法院点	第1群	序、第1話第6話	ヲ	イ	テ	カ
東大寺点	第3群	第7話以降	ハ	ニ	テ	ヲ
存 疑						
西 墓 点	第1群		ヲ	イ	テ	カ
参考点図	群	位 置	5	6	7	8
						
妙法院点	第1群	序、第1話第6話	ノ	モ	ニ	シ
東大寺点	第3群	第7話以降	モ	ミ	ト	ノ
存 疑			?	?		
西 墓 点	第1群		ノ	モ	ニ	シ
参考点図	群	位 置	9	10	11	12
						
妙法院点	第1群	序、第1話第6話	ハ			
東大寺点	第3群	第7話以降	キ	ス	ヨ	ル
存 疑						
西 墓 点	第1群		ハ	ウ	ミ	ヨ
参考点図	群	位 置	13	14	15	16
						
妙法院点	第1群	序、第1話第6話		アリ	シ	ム
東大寺点	第3群	第7話以降	トイハム	セスシテ	ニシテ	シテ
存 疑						
西 墓 点	第1群			ネ	トキニ	ス

参考点図	群	位 置	17	18	19	20
						
妙法院点	第1群	序、第1話第6話	ソ			
東大寺点	第3群	第7話以降	トシテ	カ	レ	シ
存 疑						
西 墓 点	第1群		セシム	モノ	セリ	シテ
参考点図	群	位 置	21	22	23	24
						
妙法院点	第1群	序、第1話第6話				セラル
東大寺点	第3群	第7話以降	ク	ヤ	ナ	
存 疑						
西 墓 点	第1群		ラ	マシマス	ナリ	トイヒキ
参考点図	群	位 置	25	28	29	30
						
妙法院点	第1群	序、第1話第6話		シテ	ヨリ	
東大寺点	第3群	第7話以降	コ	イハム	ナリ	ヌ
存 疑				ヘリ		
西 墓 点	第1群				オモハハ	ナ
参考点図	群	位 置	31	32	33	
						
妙法院点	第1群	序、第1話第6話		オイテ		
東大寺点	第3群	第7話以降		タマヒキ	コト	
存 疑						
西 墓 点	第1群		ツレトモ	タテマ ツラム	コト	